

課題部門：男女共同参画社会を考える

タイトル：女子教育から考えた男女共同参画社会

作者：文学部 日本文学科 2年1組 西谷 梨

私は、中学、高校、そして大学と、女子校で学んできた。男女の違いが顕著に出てくる時期を、女子のみで過ごしていた。女子校は私にとって過ごしやすい環境だった。「男子がいるから女子はおしとやかにしなければ」など存在しない。「こういう自分であるべき」ではなく、「自由に自分らしくいられる環境」だと思う。そこには女子も男子も無く、主役は私たちである。私にとって女子校とはそんな印象だ。

女子校は、女子教育の充実を目指すことを目的とした学校である。しかし明治、大正時代の中等教育を施す女学校での教育内容は、勉強ではなく家事や裁縫など花嫁修業のようなものであったそうだ。女学校では、在学中に縁談が来て嫁入りするため中退する生徒は勝ち組扱いされ、残った学生も卒業するとほとんどが結婚し家庭に入ったと聞く。この頃の女子教育は、卒業後の結婚を前提としており、多くの女子が若くして嫁入りしている。女性が社会に進出している現代で、晩婚化が進んでいる現象とは正反対の時代である。

今の女子校の教育方針は女学校とはまったく異なり、女性の社会進出を謳うものが多い。“男は仕事、女は家庭”など時代錯誤な固定観念だと一蹴されるこの時代において、花嫁修業など、もはや死語になりつつある。しかし私はこの固定観念を否定はしない。平等な人材として男女を見て、そのように考えるに至った。

「社会に必要な人材」とは、能力があるかどうかという一点である。性別により視点や感性の違いはあれど、能力という点においては性差など無く、その一点のみで比較して優秀な者を採用する。それだけであれば本来差別など存在しないのだ。しかし職に就けば、それを中心とした生活が始まる。それは生活リズムなどの短いサイクルの話ではなく、年単位の大きな流れの主流となり、その中で結婚をすれば、子どもを産み、育てる期間がある。そうした中で変えられないのは、「妊娠、出産をするのは女性である」ということだ。ここで男女に大きな差が生まれる。生物として避けられない理由であろうと、会社にとって利益にはならない話であり、それは差別でもなんでもない。事実、会社にとっての良い人材として、男性の方が適しているのではないか。つまり長い目で見て採用する場合、産休や寿退社の可能性が無い男性は、「男性である」ということが既に就職面で有利になるのである。すべての女性が結婚や子どもを望むわけではないため、女性という理由だけで就職や昇進が不利になるのも見過ごし難い問題ではあるが、妊娠出産を担うのが女性である限り、その可能性はぬぐい切れないのも事実だ。

そう考えた結果、“男は仕事、女は家庭”は昭和の価値観であると批判されはするが、実際家庭の形としてもっとも実現しやすい妥当な考え方だと思う。問題は、それを望まない人に

も同様の固定観念を押し付けてしまうことである。このような問題において、私が重要だと思うのは、否定しないことだ。

近年は女性の社会進出を後押しする政策も見られ、実際その恩恵を受けている人も少ないだろう。その反面、平等を意識するあまり、女性差別に敏感になりすぎている傾向があると思う。やたらと差別に関連付けて騒いで、女性が対等にみられるはずがない。そういった行き過ぎたフェミニストはネットでも揶揄され、女性を特別扱いするその行い自体が男と女の差を浮き彫りにするようで、男女平等から遠いものだ。周囲の目を気にする日本人の習性なのか、女性管理職が少ないだとかで政策を進めているのは、結局まわりの諸外国に比べ数字が劣っているからで、自らの意思が無いように思う。根本からの平等化を図るには、「自分はこう在りたいのだ」という自由な理想を掲げる主体性が無ければならない。外国ではそれが強いからこそ、結果として女性が多く活躍しているのではないだろうか。

ジェンダーレスとは、性差が無いことである。女だから、男だからと考えず、僕でも私でもない自分の意志を持ち、それを言葉ではもちろん、環境にも否定されない社会。それが私の考える男女共同参画社会である。